

第二回 喜多流特別公演

平成二十六年四月四二十七日(日)

午後十二時開演(午前十一時十五分開場)

十四世喜多六平太記念能楽堂



第3回喜多流特別公演 平成27年1月25日(日)

【竹生島女体】 香川 靖嗣
【山姥】 粟谷 能夫
他 仕舞・狂言

平成26年喜多流職分会主催公演一覧 会場主催:喜多能楽堂(東京)

■喜多流職分会

- ・5月25日(日)12時～
【忠度】 佐々木多門
【源氏供養】 佐藤 章雄
【鍾馗】 粟谷 能夫
- ・6月22日(日)12時～
【巴】 高林 周二
【杜若】 内田 成信
【鶴飼】 友枝 真也
- ・8月24日(日)12時～
【半蔀】 大島 輝久
【阿漕】 友枝 雄人
- ・9月28日(日)12時～
【経政】 香川 靖嗣
【蟬丸】 金子 匠一
【緩鼓】 内田 安信
- ・10月26日(日)12時～
【松虫】 金子敬一郎
【井筒】 松井 彰
【殺生石女体】 大村 定

- ・11月23日(日)12時～
【小督】 塩津 哲生
【六浦】 粟谷 明生
【黒塚】 大島 政允
- ・12月21日(日)12時～
【俊成忠度】 笠井 陸
【龍田】 佐々木宗生
【项羽】 出雲 康雅

■喜多流青年能

- ・5月24日(土)13時～
【西王母】 谷 友矩
【野守】 塩津 圭介
- ・9月27日(土)12時～
【田村】 高林 昌司
【六浦】 佐藤 陽
【猩々乱】 佐藤 寛泰

* 演目・出演者・期間・料金等は変更する場合がございます。あらかじめご了承下さい。
* 喜多流青年能: 喜多流職分会の華足をうけて、平成十年度より次世代の喜多流を担う修行中の青年たちが中心となって『シテ』を演じる能会で、年一回開催されます。

能
松

シテ連・村雨の靈 狩野了
シテ・松風の靈 友枝昭世

風

五

見留

ワキ・旅僧 宝生欣哉

小鼓 大鼓
國川 純
鶴澤洋太郎

笛
松
田
弘
之

休憩二十分

仕舞花籠 村田佐藤章雄
香川靖嗣

佐藤寛泰
大島輝久
長島茂介
塩津圭介
地謡

狂言 清水

シテ・太郎冠者 山本則重 アド・主 山本則秀

能
土蜘蛛

ワキ・独武者 森 常好
ワキ連・頼光の郎党 館田 善博
小鼓 大鼓 佃 良太郎
大倉源次郎 藤田貴寛
笛 太鼓 觀世元伯

附
祝
言

終了予定 午後四時半頃

牛後四時半頃

土蜘蛛

土蜘蛛

太郎冠者の待遇をよくしてやれと、鬼の威を借りて強要する。食われたら大変、主人は鬼の要求を呑み、帰って来る。
しかし、主人は鬼が太郎冠者をやけに晶脣するのが不思議、その声が太郎冠者によく似ているのが不審で、それに大事な桶が惜しいのでもう一度野中の清水に出かけることになるのだが、さてその結果は。
今に残る室町時代の堅牢な根来塗の桶がいかに大事にされていたか、目に浮かんで来るようであり、また当時の茶の湯の盛行も何われる狂言である。

明日、茶の湯の会を催そと企画した主人は、名水で有名な野中の清水（播磨国印南の野、現在の神戸市西区岩町野中）の水を汲んで来いと太郎冠者に命令する。夕刻の野中の清水には鬼が出るというから許してくれと言つても、主人は許さない。主人秘蔵の桶を持って汲んでこいと迨い立てられるが、太郎冠者は一計を案じる。

野中の清水には出かけずに、鬼に食われそうになつたので逃げてきたと嘘を言つて、駆け込んでくる。主人は大事な桶はどうしたと尋ねると、追つて来る鬼に投げつけってきた。後方でバリバリという音がしたから鬼が噛み砕いたに違いないと答える。すると主人はあの桶はお前なんかよりはるかに大事な桶、それが惜しいから清水に取りに行こうと今度は自ら出かける。太郎冠者は鬼の面をかぶり、野中の清水に先回り

所に移るが、國の風度の漂る、勿層の如きはさて置かれて、間内があれ、それを超えればもう播磨の國である。時は秋の夕暮。蟹の塩屋もまばらな海岸の寂しさは、耳近き高波の音、友千鳥の鳴き声、そして松風の音によって一層身にしみる。在原行平、光源氏の流謡の地として須磨には歴史的な寂しさが漂つてゐる。

旅の僧が、そこに生えてゐる一本の松の謂れを土地の人々に尋ねると、松風、村雨、二人の蟹の旧跡などといふ。もはや日暮れ、傍の塩屋に一夜の宿を乞おうと王を待つ。と、そこに潮汲みの二人の蟹が現れる。僧はいつたん宿を断られるが、見苦しい宿ながら出家の人のあるならば、蘆の火を焚さましようと、松の木の柱と竹垣の塩屋に引き入れられる。ここは昔、在原行平が「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつわぶとこたへよ」と詠んだ所、また先ほど聞けば松風、村雨の旧跡のこと、僧がそれを言うと、二人の蟹はひどく愁傷の様子。実は二人は松風、村雨の幽靈であつた。行平の中納言、須磨の地で過ごすこと三年、その間いやしい蟹の姉妹を召し、松風村雨と名をつけて、つれづれを慰めたが、三年経つて都に帰り、間もなく世を去つたという。二人は、いにしへを思えば懐かしい、立烏帽子と狩衣を残しておいで下さつたが、形見を見るたびに行平への思慕の情はつのるばかり、再び訪れるはずはないが、「立ち別れ因幡の山の峯に生ふる松とし聞かば今帰りこそむ」とも諺んだ行平への執心は今も消えない。姉の松風は妄執の舞いを舞うのである。夜明けに僧が目覚めると、聞こえてくるのは打ち寄せる高波の音、鳥の声、松風の音のみ。

よく知られた曲であるが、まさに「心狂氣」の姉のあわれさ、姉をたしなめつつも、自らも執心に囚われている妹のけなげさ、貴公子に愛されたいやしい蟹の姉妹の心情が須磨の景物と一緒につていて、さらに格調高い節と舞に、心打たれる曲である。私達にとって松という樹木は他の樹木と異なり、すぐれて靈性を感じさせる木である。「手向け草」を結び、「万世」を祈る。「神さび」た一つ松は、木であるのに「一人」と呼ばれて歌に歌われた。松風は松に行平を見た。それは果たして單なる幻であるのだろうか。余韻縹渺の中で私達は松風に搖すられる。

れで都に帰つてゆく。勇壯で、派手な場面が繰り広げられるのであるが、退治される土蜘蛛に一点の悲哀の情が纏ひ込まれてゐることが印象的である。その登場において化生の者は「わが背子が来べき宵なりさしがにの蜘蛛の振る舞いかねてしるしも」という歌を口ずさむ。この歌は古今和歌集に載せる衣通姫の歌。蜘蛛が現れると、恋しい男がやつてくるという俗信に基づいて美人の衣通姫が「帝をこひたてまつりて」歌つた歌である。何故、恐ろしい土蜘蛛にこのような妖艶な歌を歌わせたのか。また、後半に塚の中から土蜘蛛は「汝知らずやわれ昔、葛城山に年を経る、土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障りをなさんと、賴光に近づき奉るに、かへつて命を断たんとや」と名乗つて現れる。

日本書紀によると、古く葛城には土蜘蛛一族が住んでおり、神武東征神話のなかで剣根という人物が中心になつて、神武天皇は土蜘蛛を葛で作った網で覆つて殺したといふ。だから、この地を「かづらき」と言うのだといふ地名起源説話が語られる。このような神話を引いた作者の意図は奈辺にあらうか。

本曲は平家物語の「剣巻」（屋代本や百二十句本など）をもとに作られた曲だといふ。中世の武勇譚に添加されたこの神話性（衣通姫の歌も含めて）は、本筋ではないけれども能という芸能の奥行を暗示するものと思われる。